JASE
現代性教育研究ジャーナル

2012年
No. 14
2012年5月15日（毎月15日）発行

日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION

〒112–0002 東京都文京区小石川2–3–23 春日尚学ビル Tel.03–6801–9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 本橋道昭
© JASE. 2012 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

震災における生と性を守る活動…… 1
北丸雄二のニューヨークリポート⑭…… 6
「ありのままのわたしを生きる」ために⑭…… 7
今月のブックガイド…… 8
JASEインフォメーション…… 9

震災における生と性を守る活動

東京医療保健大学医療保健学部看護学科准教授
住民とともに活動する保健師の会代表
渡會 睦子

はじめに

2011年3月11日の東日本大震災より1年余、まだまだ傷跡は深く支援を必要とする場面も多くあります。被災された方々へ心よりお見舞い申し上げます。

東日本大震災直後、私は仙台市役所と連絡をとりながら、宮城県仙台市若林区に保健師として避難所支援にあたらせていただきました。その後、2011年4月に福島県の避難所に行き、原発問題からの健康被害予防のための取り組みを現在も継続支援していますので、震災における生と性を守る意味も含め報告いたします。

震災当初の仙台市における被災地状況

3月16日勤務後に羽田空港から山形空港へ向かいました。東北でも珍しいほどの大雪で着陸のために30分ほどかかる状態でした。3月17日朝、仙台・山形間のバスは利用客が多いと聞き、現地の人に迷惑がかからぬようLPガスで動くタクシーをチャーターしました。

東京から段ボール3箱分の物資は持ってきたものの、刻々と求められる支援はかわっていく状況にありましたので、「山形からもっていく必要のあるものはあるか」と仙台市役所災害対策本部に聞いたところ、「まだ津波でぬれたままの服の子どもたちがいる。服、おむつ・血圧計用の電池が必要」との返答でした。空港近くの東根市子育て健康課保健師から子ども服や公民館に集まっている服をいただき、他に子ども服700着等を自費購入し、タクシーを3台に変更し荷物を詰め込み現地に向かいました。

そして私は3月18日から22日まで、避難所支援にかかわらせていただくことになりました。

仙台市若林区は、最も早く多くの遺体が見つかったと報道があった地でした。避難所は55か所9,619人、

写真１　３月 20 日、若林区の津波で流されてきた車。生存者確認チェック済みの×印が付けられている

写真２　３月 22 日、中学生に子どもたちの面倒を見てくれる関係づくりができた！

避難所に電気・水道が通りはじめ、衛生材料や食料などの物資は多々入りはじめ、足りないのは衣料品でした（写真１）。

避難所では、生活を支え津波に流された薬の確認・処方手続き、ショックで上昇した血圧の管理、感冒や持病の悪化予防の仕事がメインとなりました。また、施設入所が必要な高齢者は入所手続きを進めていましたが、その中にはよく話を聞くと実は家族は亡くなったと思い込んでいて連絡を取っていないだけの高齢者もおられ、家族が涙を流しながら迎えに来てくださるケースがありました。

津波で汚れたままの服装で 10 日以上過ごしてきた方がいらしたり、自己主張をあまりしない我慢強い東北の方々に対し、周囲の状況を見ながら保健師としてよく話を聞き引き出すことも重要な役割で、そのためにも多くの派遣支援のあることが望まれました。避難者家族の幼児２名のストレス発散のために絵を一緒に描き、その絵で感染予防のパンフレットを作成し、一緒に避難所内の各家庭に配布するなど、避難所内での関係づくりも考えていきました。

若林区での支援最終日、その家族の母親から「入学を楽しみにしていた姉妹に『小学校に入れるの？』と聞かれ、そんな心配をさせてしまったのかとハッと気がついた」と涙ながらの告白を受けました。２人の女児に「保健師さんをぎゅ～してくれる？」と聞くと２人とも強く抱きついてきたので、姉妹に「大丈夫。小学校に入学できるから安心してね。大丈夫だからね」と耳元でささやくと、ますます強く抱きつきながら頷いていました。

母親の手を握り、若林区保健師の相談窓口のことや引き継いでサポートする方々が来ることなどを伝えました。避難所を離れる際、避難者の方々、町内会の方々とハグや握手をして涙ながらに別れを惜しみました。１週間もいられなかったのにつながりは濃く、交代の保健師さん方がいらっしゃるので大丈夫と自分の心に言いきかせました。ただ、現実を受け入れ始め今後の生活を考えたときに、仲が良いと思われた人たちでも嫉妬などの感情が表れ複雑になってきたので、記録に残し引き継ぎました（写真２）。

避難所運営をしてくれている町内会の役員も 65 ～ 80 歳の男性で、数日間働き続けたこともあり全員血圧が高値です。消防団もみな高齢者ですが、毎日浜に捜索に出ています。「震災前に前立腺がんが見つかり、今日は検査日だったが、みんなが大変なのに受診なんてできない」と力仕事をしてくれる姿に受診勧奨しつつ、「みんなの生」のために誰もが前を向いて動いていることを実感しました。

住宅街では、中学生たちが「地震で困っているお宅にボランティアでお手伝いします」というチラシを各家庭に配布していました（写真３）。

皆が生きることに必死で「自分の命だけでなく、みんなの命を助けたい」という状況でした。

福島県における被災状況

東京に戻り、仙台市若林区での支援報告とともに被災状況確認のために、性問題・性教育対策のために連携していた福島県や岩手県の教員や保健師もふくみ、

写真３　３月 19 日、避難所に帰る途中、各家庭に「ボランティアします」と書かれたチラシを配る中学生に遭遇！みんなが町のために頑張っている !!

200 件の e-mail を出しました。やり取りをしているうちに、宮城県・岩手県には全国から保健師が派遣されているのに、福島県にはほとんど他県自治体の支援が入っておらず、支援が入るはずが当日に来なかったり、困惑した経験をもつ自治体が多いことを知りました。原因は原発問題でした。

そこで私は福島県養護教諭の代表や保健師と連絡をとり、震度６の余震があった翌日４月８日に夜行バスで福島県に向かいました。

町の雰囲気

町は驚くほど普通に時間が流れていて、老若男女、マスクも防護も何もせずに歩き、駅前も普通ににぎやかでした（写真４）。

「もう過剰に考えて予防したり家に閉じこもるのに疲れた」

写真４　４月８日、福島県福島市の町の雰囲気

「子どもたちは将来を予測する力が乏しいので、今予防することの重要さが予測できない」

という意見や、

「なぜ危険な状況なのに子どもたちを外に出すのか」

「外であっても部活動を頑張らせないと将来の進学にひびく」

などさまざまな住民の意見が飛び交っており、他都道府県が得ている福島県のイメージとはまったく違った状況だったと思います。避難所のケアをするつもりでジャージにリュックサックを背負い、完全防備で福島に入った私は、夜行バスの中でも街中でもどこから避難してきたのか聞かれるほど浮いている状態でした。

４月９日、福島市内の避難所になっている高等学校を巡回しました。避難所の状況は、

・他都道府県保健師の支援はきていない。
・避難所ケアの手が足りず、避難所となった学校の養護教諭がケアを行っているところがほとんどで、震災直後から寝泊まりもしながら避難所のケアにあたってきている。
・医療や生活を支えるために、福島県内医療生協・消防団・NGO 等の団体が活躍している。
・県保健師は３日に１回の頻度で巡回しており感謝されている。
・保健師派遣の支援要請もしたいが、他職種の理解が得られず要請できない市もある。
・他県から支援希望があっても原発から遠く離れた地区ばかりでやるせない気持ちをもった。
・福島県民同士でも知識が乏しいと差別偏見が生じている。

などと伺いました。また、福島県養護教諭代表と避難所を巡回しながら、県と市の保健師と会うことをお願いし、保健師と養護教諭の交流を図り連携できるようにつなぐことができたことを嬉しく思いました。

さまざまな心の問題

４月 10 日には、福島県浜通り地域に移動し、市町村保健師と住民の方に被災状況を確認しました。浜通り地域でよく聞かれた言葉が、

「福島は頑張ろう！じゃなく、踏ん張ろう！の段階です」

「日本に福島は見捨てられました」

「支援は何もいりません。今後、私たちの子どもたちが福島県出身ということで偏見の目で見ないでほしいことがのぞみです」

という言葉です。

まったく思ってもいなかった言葉を聞いて、私自身とても苦しく、「復興」という言葉が見えない悔しさに机をたたき、文章にまとめることもできない日々を過ごしました。ただ、原発問題については、東京電力を悪くいう住民とは誰一人と会いませんでした。長い間、出稼ぎに出ないと生計を立てられなかった浜通り地域にとって、東京電力は職業を与えてくれたありがたい職場です。その歴史や地域性、気持ちも大切にしながらケアする必要があると感じました。

それらから、全国自治体保健師の福島への派遣を進めるために必要な安全性の証明に役立てることや、真実の被曝量を知り目に見えない放射線の被爆量を可視化するために、原発周辺市町村の保健師へガラスバッジを購入し、約１年寄付し続け、今も分析を続けています。

被災地でのマナー

過酷な状況下で多くのストレスを受けながら、町内会・青年団・消防団や行政職員等はオーバーワークになっており、混乱状況で仕事がうまくいかないことへの責任を感じたりもしています。動くことのできる人材でできる保健活動を、涙を流す暇も余裕もなく精一杯懸命に行っている現地の医療保健行政職員の気持ちもひしひしと伝わってきていました。

そのようななか、これまで震災時から懸命に活動してきた者に意見するような外部の人間や、研究を目的とする者が入ってくることは負担につながることも目の当たりにしました。意見を言うなら本人が動くのが被災地での鉄則です。

生と性の問題

被災地の状況はまさに「みんなの生＞生＞性」でした。今までの内容から、皆様は「みんなの生＜生＜性」であると思いますか？　もちろん思わないと思います。本当に性の問題よりも、生きることに必死でした。住居が避難所というプライバシーの守られた環境ではないため、着替える場所や寝る環境の問題はありましたが、避難所は学校内の教室も使うことができたため、その配置も家族・親類・男女等できる限りの配慮はされていました。

写真５　３月 20 日、町内会で活動してくれている元気いっぱいのお母さんと一緒に避難所の中でテントを利用した着替え場所を作った

震災１週間での衣類の物資が届くころには、着替える場所の確保のために救援物資の中にすでに小型テントがあり、「着替え中」等の札も準備し使用することができました（写真５）。

東北地方の現地ではまさに性別なく、暖を取る、食事を摂る等の生きるための行動が優先で、生きることに必死な状況にありました。東京に戻り学会に参加した際に、「レイプ事件が多すぎて、某大学病院では派遣をやめたと聞いたのにあなたは大丈夫だったのか」と聞かれ、現地を見ずに噂ばかりが先行した大きな誤りであると感じました。

そのような噂も東京ではあったようですが、現地の医療保健従事者とは「噂に振り回されて支援に来ないほうが大問題だ」と話し合った経過もありました。

震災前の福島県の性の現状と対策

私はこれまで山形県を中心に保健所保健師として、1999 年より NGO（Peer Network Yamagata）代表として活動し、その活動では、県・市町村教育委員会・教師・保護者・地域の人々と連携し、小・中・高等学校各学年の各発達段階に応じた系統的・継続的な PowerPoint 性教育教材「生きるための心の教育：性教育」の作成・配布・教育・指導のシステムづくりを

写真６　PowerPoint 性教育教材「生きるための心の教育：性教育」

写真７　３月 21 日、インフルエンザ予防に子どもたちの絵を活用して簡易パンフレットを配布。「うがいにマスクと手洗いお願いします」

実践してきました（写真６）。

その普及結果より、山形県では 15 歳以上 20 歳未満の人工妊娠中絶率（年齢階層別女子人口千人対）を 2000 年 18.3 全国６位から、2000 年からの性教育活動開始後、2007 年 5.6 全国 43 位と約３分の１に、性器クラミジア感染症を定点あたり 2000 年 8.8 から 2007 年 1.5 と約６分の１に減少させることに成功し、これらは性問題対策を支え、さらにいのちの軽視・DV（Domestic Violence）・虐待等、現代のさまざまな問題予防にもつながっていきました。

この方法は隣県にある福島県教育委員会の性教育教材としても導入され、15 歳以上 20 歳未満の人工妊娠中絶率 2004 年 17.7 全国２位から 2004 年からの性教育活動開始後、2009 年 8.1 全国 16 位と２分の１に、性器クラミジア感染症を定点あたり 2004 年 8.6 から 2009 年 3.06 と約２分の１へと低下させることに成功していました。

そのようなつながりから福島県とのつながりは濃く、震災後も学校や保健所を通して関わることができました。

「生きるための心の教育：性教育」教材内容は、小学生には命の尊さや体と心を大切にする意味を伝え自尊心を養い、中学生には命の尊さや体と心を大切にする意味に加えて、思春期の複雑な心と体や性のリスク、高等学校生には命の尊さや体と心を大切にする意味に加えて、大人としての責任や性のリスクを伝え、性行為は経済的・生活的・精神的・性的自立ができていなければ大変危険なリスクを伴う行為であることなどを青年期の発達課題を利用しながら教えていきました。

また、孔子やカント、生命倫理、男女平等参画、子育て、青年期の課題等々を盛り込み、性教育の時間確保が困難ななか、さまざまな教科でいのちや性について触れられるよう工夫した約 600 枚のスライド教材になっています。

この性教育教材の高等学校卒業時の最終目標は、大人になる責任について学び、青年期の課題を果たすことにあります。その結果、「相手と自分の心と体」を守ることのできる知識・意識をもち、今の行動が将来の自分と大切な家族を脅かす可能性を見通す力をもち、相手と話し合いができ、そして、行動をコントロールする力を身につけ、性問題の予防にもつながるようになっています。

性問題対策においても他の公衆衛生活動と同様、その地域の歴史、地域性、時代に合った活動が必要です。

福島県では、原発問題以外は普通の生活である地域も多いのですが、そのような地域でも学校倒壊の影響で週に数日しか登校できない学校もありました。その際には、長期休み等に浮上する思春期問題が発生する可能性もあり、これまでと同様の継続的支援が重要です。

震災後、福島県内では、これまで 20 校ほどで講演活動を繰り返してきましたが、震災後半年ほどたった頃の彼らのアンケートには「被災してかわいそうと言われることでそうだと思い込んでいたけれど、生きるための心の教育を学んで、自分自身が輝けるような生き方を選択してもいいんだと、ハッと気づいた」等の震災以前からの継続的な「生きるための心の教育」でもある性教育が、今の心の支えにもなっていくことが再認識させられるなど、結果として現れてきています。

震災の起こる前から、自分や他の人を大切に思う心をどのように育てているかが大変重要だと感じています。

北丸雄二の Sexuality Now ニューヨーク リポート

NEW YORK 第14回 NEW YORK

かっこいい考え方

私はブロードウェイの劇やミュージカルの翻訳もしていますが、その中の１つにゲイの男の子の登場するものがありました。日本版の公演でその役を演じた若手の俳優が、上演後のトークショーのときに観客に向かって「オレ、ホントはこういう役、イヤなんだよね」と口を滑らせてしまったことがありました。とても「男らしい」子で、ナヨナヨしたその役が自分の分身だと思われたくなかったのでしょう。彼に限りません。日本の芸能界ではいまでもゲイ役をやるときに俳優たちがまるで枕詞のように「ぼくはゲイじゃないですが」「そっちのケはないんですが」と断りを入れて記者会見などで笑い合うことが倣いになっています。

パトリック・スチュワートという大ベテランのシェイクスピア俳優が、1990 年代、ゲイの役をやったときにこう言っています。

「ある人たちは私に、ゲイの役なんて引き受けて役者の経歴に傷がつくんじゃないかって心配してくれたりする。彼らは、私が殺人犯の役をやったときにはなにも心配しなかった。ゲイと殺人犯、彼らはゲイのほうがひどい人間だと思っているのだろうか？　私にはゲイの友人がたくさんいる。私がゲイの役をやるときに心配するのは、私がゲイの役を演じることで、私の経歴ではなく、私のゲイの友人たちを傷つけたりしないか、ということだ。私は彼らのためにも、誠実にその役を演じ遂げようと思う」

アメリカの若手俳優マット・デイモンはベン・アフレックととても仲がよいので一時ゲイじゃないかと噂が立ちました。彼もやはり次のように言いました。

「ぼくがゲイかゲイじゃないか、その質問に答えるのはとても難しい。もし不用意に自分はゲイじゃないって言ったら、まるでゲイであることがイヤなこと、悪いことであるかのように受け取る人がきっといるだろう。だからぼくは安易に自分はゲイじゃないなんて言えない。ゲイであろうがなかろうが、そんなこと自体どちらでもいいことだって答えるだけだ。ゲイだと思われたってぜんぜん気にしないって」

これらは 80 年代米国の「政治的正しさ（ポリティカル・コレクトネス）」のキャンペーンを経た上での言説です。あれからエイズの蔓延もあって、ゲイへの抑圧や差別は強まったけれど、同時にそれを跳ね返す「正しさ」の運動も拡大しました。つい先日もジョージ・クルーニーが自身のゲイ説について「誰かがぼくをゲイだと思ったところで誰も傷つくわけじゃないから、別にそう思わせておけばいいんじゃない？」と言っていましたが、これもマット・デイモンと同じ文脈です。ただ、クルーニーの口ぶりからはそれがもっと軽く言える時代になっていることを感じさせます。

同性婚が認められるまで自分たちも結婚しないと言っていたブラッド・ピットの例もそうですが、アメリカでは芸能人たちは往々にして社会的メッセージのスポークスパーソンでもあります。対して日本の芸能人は社会的メッセージを伝えると煙たがられる。いわゆる「事務所」の存在が日本の芸能人たちの社会的発言を遮っているのですが、一方ではゲイを嗤うことが社会的発言だとは気づいていないのです。自分の好きな俳優たちにそうやって間接的に嗤われたと知る若いゲイやレズビアンのファンたちがどれだけ絶望するのか、彼らはおそらく考えたことがないのでしょう。

冒頭の若手俳優に、パトリック・スチュワートとマット・デイモンの発言を教えてやりました。すると彼は青い顔をして自分の不用意な発言を激しく恥じました。それが、弱者を助けるという「男らしい」行為といかに逆のことだったかに気づいたのです。翌日から彼の演技はがらっと変わりました。ものすごく素直で迷いのない演技になった。

そこに至る回路を教えてあげさえすれば、若者たちはすぐに変われます。なぜなら、そっちのほうがはるかにかっこいい考え方だからです。

きたまるゆうじ　　ニューヨーク在住（19年）ジャーナリスト／作家／元・中日新聞（東京新聞）ニューヨーク支局長。

「ありのままのわたしを生きる」ために

第14回

ふたつの自分

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のMtFトランスジェンダー。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

今年の４月から、思うところがあって現職教員を続けながらではありますが、大学院にいくことにしました。講義の中には読書会のようなものもあります。そんな講義の教室はとても静かです。その静かさは、強制や威圧や暴力による沈黙ではなく、思索によるものです。ひたすら「本」と、そこにある「思想」と向かいあいます。互いの感想や意見や疑問に耳を傾け、教員の解説を心待ちにします。この学びの場に来た瞬間、日常のなかですりきれそうになる心が、ふと和みます。

閑話休題。

教員として公私ともに充実した生活を送っていたわたしでしたが、実際には京都市内と京都府南部の二重生活をしているようなものでした。仕事が忙しくなるにつれ、だんだん日曜日に教会に通うのがしんどくなりはじめました。それでも、Ｙちゃんとは会っていましたが、気持ちのすれ違いが大きくなっていたようです。ある日、「土肥さんといっしょにいても発展しない」という言葉を残してＹちゃんは去って行きました。当時のわたしはその「発展」を精神的なものと考え、解せない思いでいっぱいでした。しかし、もしかしたら別の意味だったのかもしれないと、今になって、ふと思うことがあります。いずれにしろ、京都市内に行く必然性のなくなったわたしは、本格的に京都府南部に根をはった生活をすることになりました。

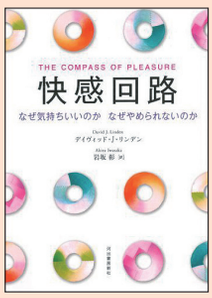
教員になって２年目のある日、放送部員のＡが喫煙で謹慎になりました。わたしは周囲の反対を押し切ってＡの家に家庭訪問に行きました。なぜなら、Ａは部落の生徒であり、部落への「好奇心」が、わたしをとらえて離さなかったからです。そんないい加減な動機の家庭訪問でしたが、それをきっかけに、わたしは校区の部落に出入りするようになりました。

そして、教員になって５年目、わたしは念願の担任になりました。「自分のクラス」という場を得たわたしは、まさに水を得た魚のようでした。わたしはあえて自分のクラスに学年の「やんちゃな子」を集めました。教員ともめ事を起こすのは、たいていわたしのクラスの生徒でした。わたしは授業もそっちのけでトラブルの対処に走りまわりました。でも、トラブルが起こった時こそが、生徒と話し込むチャンスでした。渡り廊下で風に吹かれながら、「なにがあったんや、言うてみぃ」「センセ！オレな、どうしてもあいつのあのひとことが許せへんねん」「そやけどな…」、こんな会話を幾度となく繰り返しながら、少しずつ生徒たちとの関係をつくっていきました。

学級活動で最も力を入れたのは、もちろん同和学習でした。担任になるまでは、生徒たちと教室で会うのは授業だけでした。そんなわたしにとって、同和学習は「一番したいことで生徒たちと向きあえる」時間でした。自分が今まで出会ってきた人たちのこと、その人たちとの出会いで気づいたことなどを、熱く熱く語りました。わたしにとっての部落問題は、担任している生徒の問題というリアリティがありました。それだけに、あまり積極的にかかわろうとしない教員に対しては、「なぜやらないんだ！」と詰め寄ることもありました。どうやらわたしはそうした教員からはずいぶんと怖がられていたようです。

そんなわたしでしたが、アパートに帰って一人になった時、不意に心の中の箱の存在を思い出すことがありました。例えばそれは、テレビでニューハーフの人たちを見たときでした。その瞬間、「自分もニューハーフになりたい」という思いがこみあげてきました。でも、現実問題として不可能なことはわかっていました。やがて、箱の存在を思い出すのは「情報に触れたとき」であることに気づいたわたしは、知らず知らずのうちに、そうした情報を自分から遠ざけるようになりました。情報が入ってこなければ、箱の存在を思い出すことはありませんでした。たまに思い出しても、それはプライベートなことと割り切って、自分の中にそんな箱があるなどということは、決して誰にも言いませんでした。一方、オフィシャルな場である学校では同和教育に邁進する強面の教員でした。そんな切りわけをすることは、わたしにとっては自然なことでした。

BOOK GUIDE
今月のブックガイド



快感回路
なぜ気持ちいいのか
なぜやめられないのか

デイヴィッド・J・リンデン著
岩坂彰訳
河出書房新社
1,995 円（税込み）

気持ちいいが、やめられない

セックス依存症をテーマにしたスティーヴ・マックィーン監督の映画「シェイム」を観て、その重い内容に、しばらく席から立ち上がれなかった。はたして依存症に救いはあるのか？

映画では、一人の男性会社員の日常が淡々と描かれているが、それは極端に引き裂かれたものだった。有能な社員という表の顔と、セックスにのめり込む裏の顔。過度なオナニー、セックスワーカーや行きずりの女性、ゲイナイトでの刹那的なセックス。時間のほとんどを強迫的にセックスに費やす。上司には職場の PC でのアダルトサイトの閲覧がばれ、「汚らわしい」と罵られ、恋愛依存症の妹には、抑圧してきた情動を揺さぶられる。症状は亢進し、自滅的行動はエスカレートしていく。

『快感回路―なぜ気持ちいいのか　なぜやめられないのか』は、未だわからないことが多い脳科学の中で、明らかになりつつある快感情や依存症を引き起こすメカニズムを紹介する。快感は人類だけのものか？　依存症になる過程で、脳では何が起きているのか？　著者は神経科学者で、ジョンズ・ホプキンス大学医学部教授である。

取り上げられるのは、いわゆる〈悪徳〉とみなされるような麻薬やアルコール、セックス、ギャンブル、食物などへの耽溺――依存症から、〈美徳〉とされるスポーツや瞑想、学習、慈善行為まで幅広い。そのどれもが、快感回路（報酬系）を活性化させる働きがある。

快感は土中の線虫にすら認められ、食や性など生物の生存に中心的役割を果たすことがわかる。だが、ラットの脳の快楽中枢に電極を埋め、ラット自身がレバーで電気刺激を流せるようにした実験では、ラットは交尾も寝食も忘れてレバーを押し続けて餓死しかけ、出産直後のメスは子育てを放棄した。“依存症ラット”の誕生である。過去に行われた、倫理に反した人間での実験でも、同様の結果が認められている。

「依存症も学習の一形態」、行為と快感の間に連合が生じる。そして、よく知られるように「症状が進むにつれ、耐性、依存性、渇望が現れ、得られる多幸感は徐々に弱まっていく」。依存する物質や行為に対してだけでなく、快感の感受性が低下してしまうし、再発も起こりやすい。脳の構造まで変化してしまうためだ。

双生児の研究から、依存症のリスク要因の４～６割は遺伝的なものだと推定され、遺伝子操作したウイルスによる治療の可能性も示唆されている。快感や渇望をコントロールする新薬の開発も進められ、一部認可されたが、自殺など重い副作用が判明し、認可が取り消されたものもある。一方で、（無名のアルコール依存症者たちの）12 ステップ法など、伝統的治療も「脳には可塑性があり、行動経験で神経回路を変化させることができる」とみている。

かつてゲイ男性をヘテロセクシュアルに変えようと脳に電極を埋め込む手術が行われたり、残虐な動物実験には、ぞっとさせられる。仮説や推論、「わからない」という記述も多いが、依存症発症の生物学的な基礎や遺伝的要因などがわかってきたことは、依存症への理解を間違いなく深めるだろう。依存症は意志の弱さではなく、「ストレス、幼児期の薬物摂取や虐待、社会的サポートの欠如、遺伝的要因など」一定の条件が整えば、誰でもなりうると、著者は強調する。

映画「シェイム」では、ニューヨークという大都会が舞台なのに、主人公がカウンセリングにもグループ・ミーティングにもつながらず、孤独をつのらせていくのがもどかしくもあった。例え必要な支援を得られても、回復が難しく再発を繰り返しがちなのが、依存症の特徴でもある。脳科学の知見が、少しでも、困難な回復への道に寄与してくれればと願う。

（フリーライター　まつばらけい）

JASE Information

研究会、研修会等の情報を下記まで、郵送または、
Fax03-5800-0478でお寄せください。
〒112-0002　文京区小石川2-3-23春日尚学ビル B1
日本性教育協会「JASE ジャーナル」係

全国性教育研究団体連絡協議会
第42回全国性教育研究大会
第８回中国・四国地区性教育研究大会

８月２日（木）13：00 ～ 16：55
８月３日（金）　9：30 ～ 17：00

テーマ　「さらに広げよう！性教育の視野を」

内　容　１日目：講演「性同一性障害の理解に向けて」中塚幹也（岡山大学大学院）、特別講演「Sexual Minorities, Homosexuality, Transgender and Intersexuality」ミルトン・ダイアモンド（ハワイ大学）、ほか。
２日目：分科会（小学校、中学校ほか）、ワークショップ（Simple Sex Education Techniques）、シンポジウム「性教育実践者の養成のための方策について考える」、ほか。

会　場　島根県松江市　くにびきメッセ（島根県立産業交流会館）

定員・参加費・問い合わせ

参加費／一般 6,000 円、学生 4,000 円、１日参加 3,000 円（学生 2,000 円）。定員／ 300 名。
主　催／全国性教育研究団体連絡協議会、中国・四国地区性教育研究団体連絡協議会。協　賛／日本性教育協会。
後　援／内閣府、文部科学省、厚生労働省、全国国公立幼稚園長会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、全国特別支援学校長会、（社）日本 PTA 全国協議会、（社）全国高等学校 PTA 連合会、（財）日本学校保健会、（社）日本家族計画協会、（公）日本産婦人科医会、（公）日本看護協会、島根県、島根県教育委員会、松江市教育委員会、島根県医師会、島根県学校保健会、（社）島根県助産師会（一部申請中）
問合せ先／〒 706-0021　岡山県玉野市和田 1-9-11　松江大会事務局　TEL & FAX　0863-81-6483

６月３日（日）10：30 ～ 16：50

第10 回思春期保健相談士学術研究大会
「思春期保健～強化と健康教育の推進～」

内　容　会長講演「思春期妊娠と高年齢妊娠」松峯寿美（東峯婦人クリニック）、基調講演「それぞれの分野におけるグリーフケア」竹内正人（東峯婦人クリニック）、「避妊と性感染症予防」北村邦夫（日本家族計画協会）、ほか。

会　場　マツダ八重洲通ビル　９階マツダホール
（東京都中央区八丁堀１－10－７）

参加費・問い合わせ

参加費／ 10,500 円（税込）、演題発表者 7,350 円（税込）。
定　員／ 200 名。対　象／思春期保健相談士（上級含む）、保健師、助産師、看護師、養護教諭、看護教諭、教職員、医師（その他の職種で参加希望の方は事前にお問い合わせください）。
問合せ先／一般社団法人日本家族計画協会　研修課
〒 162-0843　東京都新宿区市谷田町１－ 10 保健会館新館
TEL　03-3269-4785（月～金９：00 ～ 17：00）
FAX　03-3267-2658　　URL　http://www.jfpa.or.jp/

８／４（土）～ **８／６**（月）

第 31 回性教協 全国セミナー in 山口

【テーマ】
「より豊かな性教育を求めて～現実をみつめ、子どもと共に未来をひらく～」

【内　容】
１日目：基調報告、記念講演「日本社会における子ども観の転換～子どもへの『まなざし』を問い直す」増山均（早稲田大学文学学術院）、トーク＆トーク「共に生きる～出逢い・つながり・支え合い」、ほか。２日目：模擬授業、テーマ別分科会、ほか。３日目：理論講座、ほか。

【会　場】１日目：山口市湯田温泉かめ福
２・３日目：山口大学キャンパス

【問い合せ先】参加費／３日間：一般 10,500 円、会員 9,500 円、一般学生 3,000 円、会員学生 2,000 円、中高生 1,000 円。２日間：一般 8,000 円、会員 7,000 円、学生 2,000 円、中高生 1,000 円。１日のみ：１・３日目は一般・会員 3,000 円、２日目は一般 5,000 円、会員 4,000 円。各日とも学生 1,000 円、中高生 500 円。問合せ先／〒 151-0073　東京都渋谷区笹塚１－56－６クレセントプラザ笹塚 60C　“人間と性”教育研究協議会事務所「第 31 回全国夏期セミナー山口大会」TEL　03-3379-7556（火・木 17：00～20：00）FAX　03-3379-7561　URL　http://seikyokyo.org